れんがの家

れんがの家と納屋西面ノ／既存レンガの上に木造の屋根架構・右側に縁側部分を増築している

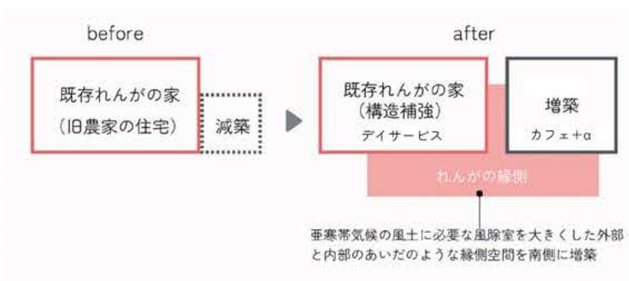
敷地鳥瞰ノ十勝の農風景にたつれんがの家と小屋群

夏のれんがの縁側／左手前にみえるレンガ壁が既存棟。奥の下見板張りの壁が増築棟。
自然に囲まれた半内部環境の中でリラックスできる北海道型(亜寒帯)の縁側空間

□アダプティブリユース　／　空家農家の転用

配置図

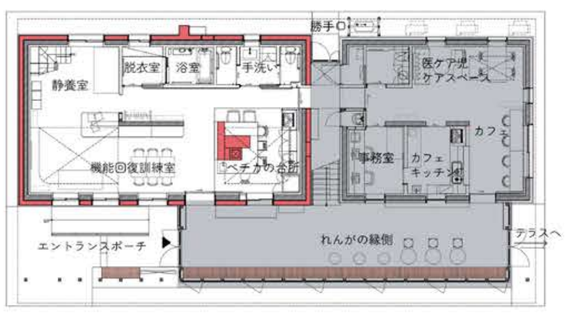
築60年の空家となっている既存れんが造農家を通所型デイサービスへとリノベーションし、更に地域の人々が利用できるカフェやオープンスペースを新たに増築することで地域福祉拠点へとコンバージョンを図っている。北海道に残るれんが造などの組積造の建物は現代の用途変更に適合できずに解体されてしまうケースが多々見られるが、本プロジェクトでは持主・事業主・地域住民の想いから、現行法規への適合を行うことで「れんがの家」を活かした改修・増築計画を行った。



ダイアグラム

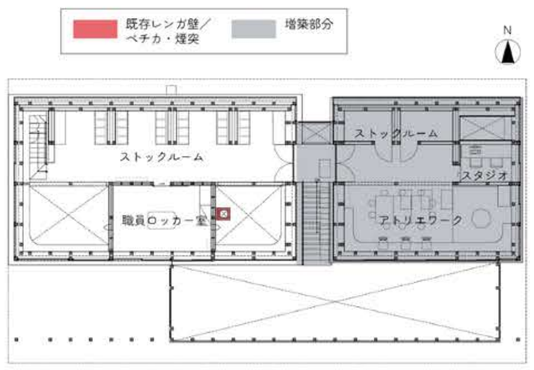
□プログラム　／　地域に開かれた福祉施設

既存れんがの家を通所型デイサービスへとコンバージョン、周辺地域の人々が誰でも利用できるカフェや2階オープンスペースを増築、更にその2棟を風除室の役割を担う縁側空間でつなぐ構成としている。この縁側空間は地域の小中学生から、高齢者、ふらりと立ち寄ったひとなど、誰もが自由に滞在し交流することのできる場所となっている。



1階平面図

閉鎖的になりがちな福祉施設を地域に開かれた福祉施設とすることで、鹿追町の地域拠点となることをめざしている。



2階平面図

レンガ壁の既存棟と下見板張りの増築棟のあいだの階段から縁側をみる

増築棟１階カフェ／窓の外にはテラス・農地が広がる。奥に見えるのはれんがの縁側

1階デイサービス内ベチカの台所／既存煙突・ベチカを囲むように作業台を配置している。
奥にはれんがの縁側の様子がみえる

れんがの家東面／敷地東側にはれんがのテラス、宅老所利用者が手入れする畑がある。
右手に見えるのは改修し外部トイレ、倉庫とした旧納屋

解体前

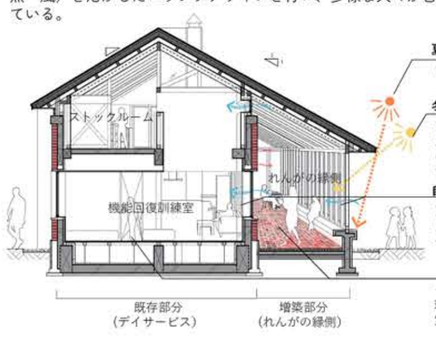
解体中内部／既存開口部の位置は残している

解体後

解体中内部／既存ベチカと煙突

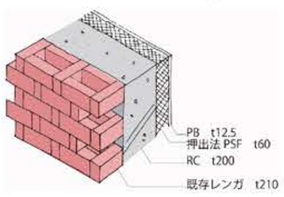
□環境デザイン　／　亜寒帯湿潤気候の縁側

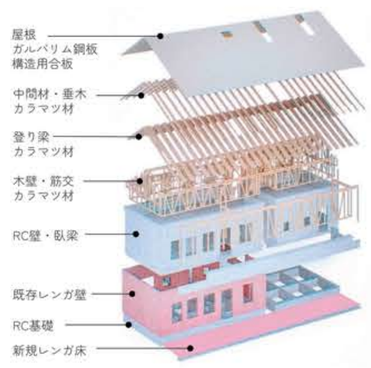
既存の住宅であるれんがの家（デイサービス）と増築した建物（カフェ）をつなぐように風除室の役割をもつれんがの縁側を増築。
亜寒帯湿潤気候に適合した室内型の中間領域としての、れんがの縁側は、自然環境（光・熱・風）を活かしたパッシブデザインを行い、多様な人々が自由に滞在できる場所となっている。



□構造デザイン　／　レンガ造再生とローカルファブリケーション

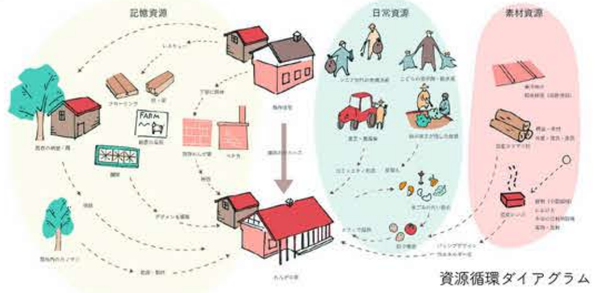
レンガ造の既存棟を一部減築した上でレンガの外観を残しながら増築し、大きな木造屋根で既存部と増築部をつなぐ構成となっている。既存レンガ壁を新規のRC造の耐力壁と臥梁で包むことで地震の揺れに対してレンガ壁を補強している。積雪量を軽減することができる勾配屋根とするとともに2階を木造とすることで軽量化。重量を軽減することで生じる地震力を小さくして耐震性能を向上させている。また住宅用一般流通材である道産カラマツ120角を用いることで、大断面中断面の加工が難しい北海道の工場の課題に対し、材料と加工を含むローカルファブリケーションを実現した。





□地域資源の循環デザイン

既存農機具庫の屋根材や農家時代の看板を再利用したエントランスサインや既存欄間を利用した壁掛け飾り、既存家屋で使われていた床材を利用したれんがの縁側のベンチなど、レンガの外壁だけでなく土地や地域の記憶（記憶資源）や敷地周辺の人々の日常生活（日常資源）、地域に見られる形態や素材（素材資源）をあたらしいれんがの家に取り入れ丁寧にデザインすることで、、地域の人々に受け入れられる寛容な佇まいとして農村風景への接続を試みた。



資源循環ダイアグラム

記憶資源のアップサイクルデザイン

既存フローリングを再利用した縁側ベンチ

既存欄間を再利用したアクセントウォール

既存屋根材と看板を再利用したエントランスサイン